

周恩来



世界の注目を集めた人 ——証言・周恩来の実像

顧問：周爾均 廖心文
編集長：鄧在軍

 新世界出版社

 人民出版社

世界の注目を集めた人

——証言・国因事の実像

編集長：鄧在軍

 新世界出版社

 人民出版社

图书在版编目(CIP)数据

他吸引了全世界的目光：回忆周恩来口述实录：日文 / 邓在军主编；
田建国等译．— 北京：新世界出版社，2015.11
ISBN 978-7-5104-5449-3

I．①他… II．①邓… ②田… III．①周恩来（1898～1976）
— 生平事迹— 日文 IV．① K827=7

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 252124 号

世界の注目を集めた人：証言・周恩來の実像 他吸引了全世界的目光：回忆周恩来口述实录（日文版）

顾 问：周尔均 廖心文
主 编：邓在军
翻 译：田建国 高 洁 杨亚然 葛天华
审 定：薛建华 岩城浩幸 大木毅 山本由美
责任编辑：李淑娟 侯俊智
装帧设计：上 尚
版式设计：北京维诺传媒文化有限公司
责任印制：李一鸣 黄厚清
出版发行：新世界出版社
社 址：北京西城区百万庄大街 24 号 (100037)
发 行 部：(010) 6899 5968 (010) 6899 8705 (传真)
总 编 室：(010) 6899 5424 (010) 6832 6679 (传真)
<http://www.nwp.cn>
<http://www.nwp.com.cn>

版权部：+8610 6899 6306

版权部电子信箱：nwpcd@sina.com

印 刷：北京京华虎彩印刷有限公司

经 销：新华书店

开 本：787×1092 1/16

字 数：300 千字 印 张：22.5

版 次：2015 年 11 月第 1 版 2015 年 11 月北京第 1 次印刷

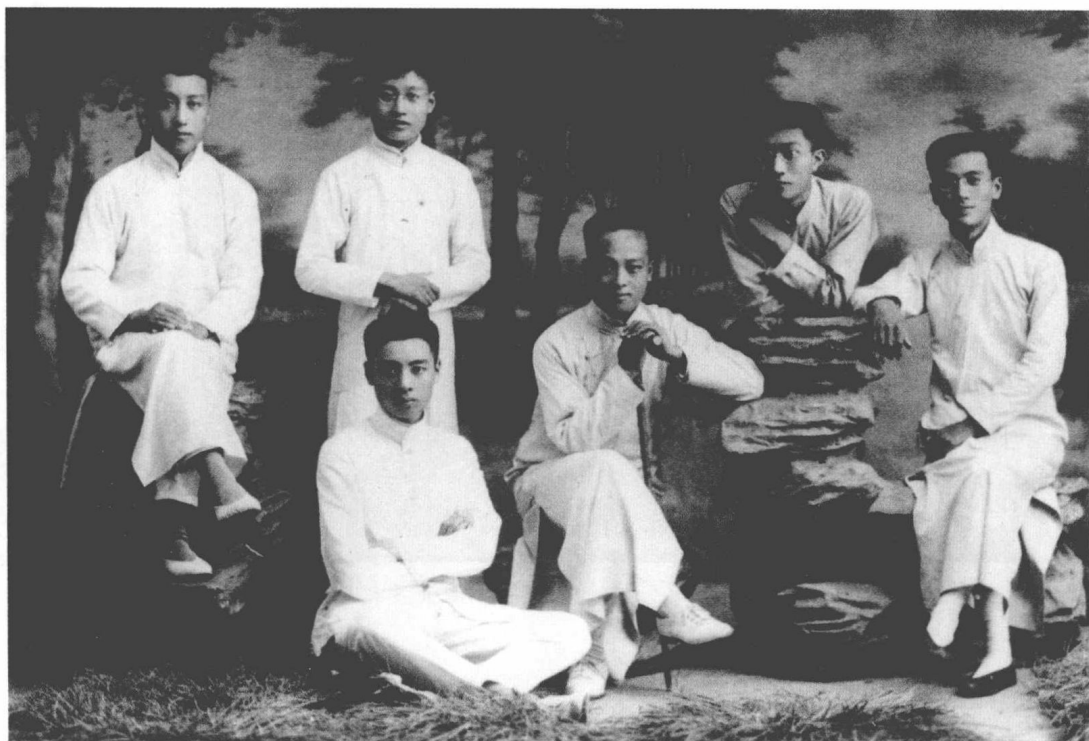
书 号：ISBN 978-7-5104-5449-3

定 价：98.00 元

版权所有，侵权必究

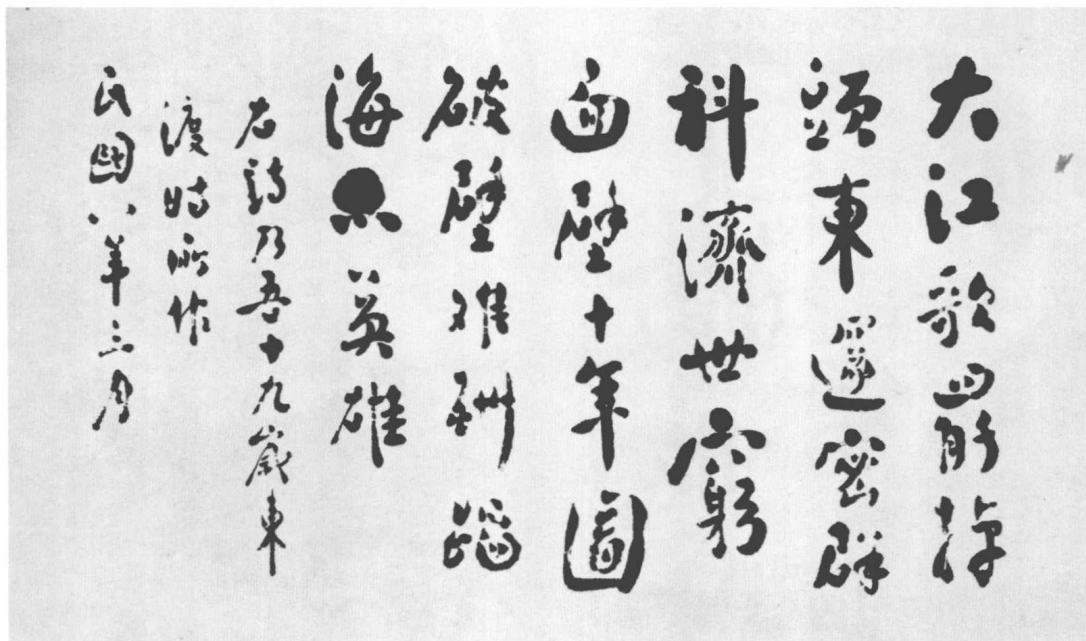
凡购本社图书，如有缺页、倒页、脱页等印装错误，可随时退换。

客服电话：(010)6899 8638



▲ 青年時代の周恩来氏（前列左端）と南開学校の恩師佢乃如氏（中央）及び同級生たち

▼ 1917年、周恩来氏自筆の書『大江歌罷掉頭東』（大江を歌い終えて東へ向かう）





▲ 『中日共同声明』に調印する周恩来総理と田中角栄首相

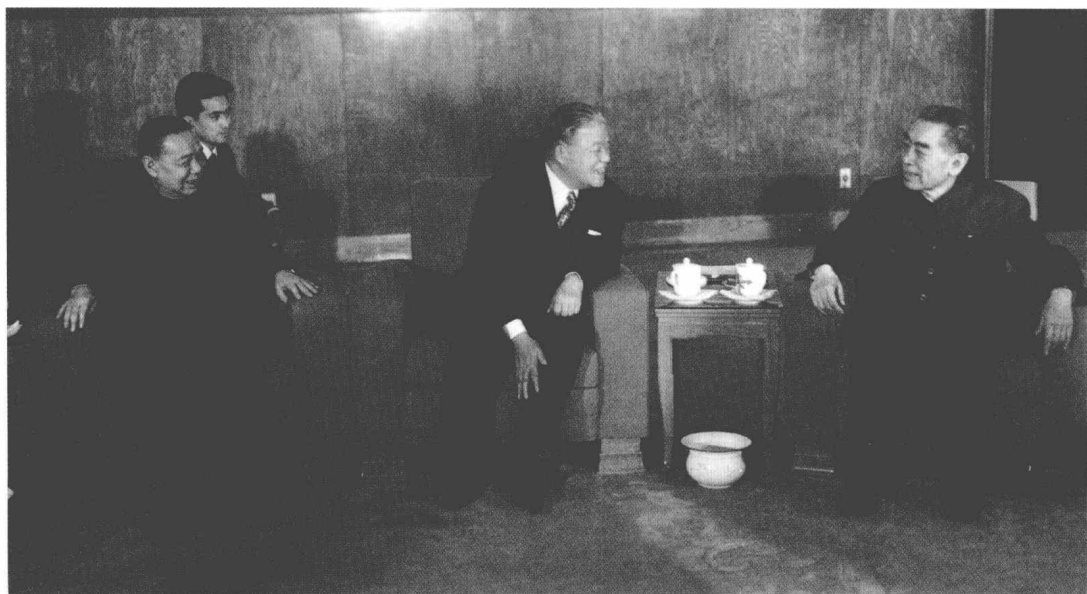
▼ 1972年、互いに酒を酌み交わす周恩来総理と田中角栄首相





▲ 周恩来氏と河合良一氏

▼ 1974年1月、人民大会堂で外務大臣大平正芳と会見する





▲ 1972年9月23日、周恩来氏、全人代副委員長兼中日友好協会名誉会長の郭沫若氏、中国中日党書貿易事務所責任者の劉希文氏が、日本日中党書貿易事務所責任者の岡崎嘉平太氏、松本俊一氏、大久保任晴氏及び随行メンバーと会見した

▼ 1960年10月、バンドン会議（1955年）に出席した日本首席代表、元通商産業大臣の高崎達之助氏と会見する





▲ 1959年10月、日本の友人である松村謙三氏と会見する

▼ 1962年11月、北京で行われた中日総合貿易に関する覚書の調印式





▲ 周恩来氏と岡崎嘉平太氏

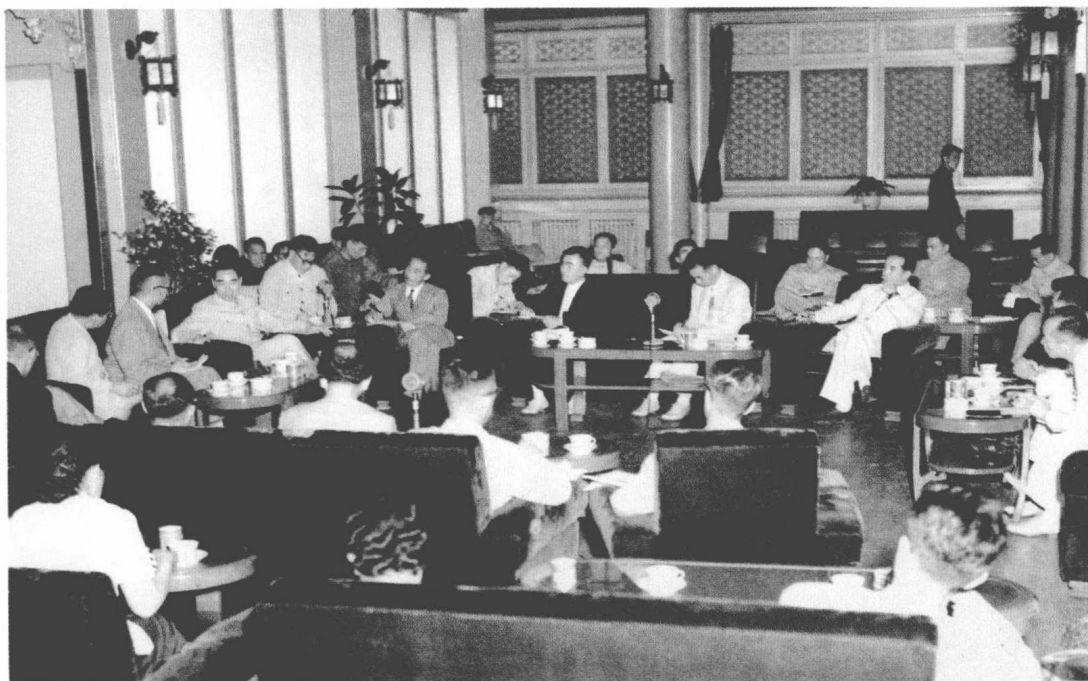
▼ 1959年、王昆氏（右から三人目）、松山樹子氏（右から二人目）、田華氏（右端）と共に記念撮影し、彼女らを中国と日本の三人の「白毛女」と讃えた





◀ 1958年、北京で日本芸術団の演技を鑑賞した後、出演者たちと親しく握手する

▼ 1959年8月、日本の新聞界、放送界の訪中団と会見する





▲ 日本の退役軍人訪中国と会見する。左から二人目は訪中団団長の遠藤三郎氏、右から二人目は廖承志氏



◀ 1972年9月30日、上海空港で訪中を終えた田中角栄首相を見送る。左から二人目は林麗蘊氏

目 次

軍事家周恩来	1
心に刻まれた周恩来の伝言	10
心に秘めたあの日々のこと	15
最高の人物と張学良に言わせた人	28
語り尽くせぬ周恩来の功績	31
古今に比類なき宰相	41
周総理と対香港政策の八字方針	49
周総理と対日外交	57
周総理と田中首相との会談	64
アジアとアフリカの人々の利益のために	72
対ミャンマー外交活動での周総理	75
周恩来と鄧小平 — 20世紀の真の知己	85
知られざる物語	101
安危共にし、風雨舟を同じくす	112
周恩来との面会	121
周恩来と末代皇族との面会	125
永遠の離別など無く、あるのは永遠の想いだけ	132
「小さなピンポン球で地球を動かす」周総理	141
周総理晩年の治療	148
私心なき心に人民	160
紅葉赤く、海棠赤し	167
すべての命を世界に返そう	174
屈辱に堪えて重きを負い、自らを厳しく律す	178
周総理に導かれた中国民用航空事業の魂	192
総理は永遠にこの世に	198
無情に見えて有情	206
兄、そして恩師でもあった周総理	214
一人の偉大な政治家で傑出した人物	228
傑出した才知と遠大な策の人	230
初対面で圧倒された眼力	234
父が「聖人」と仰いだ人	242
名画の如き会見の記憶	246

師と仰ぐ人、周恩来	251
傑出した有徳の人	259
心の中の偉人	263
わたしの一生を変えた人	265
中国の未来に目を向けて	269
人間味と親身の人	272
困難な時期に日中関係を守った人	275
周総理を兄として	280
寛容で器の大きな人	284
総理、偉大な人物、友人	286
相手の立場で考える人	288
周総理の人情	292
周総理と幸せな人民	294
最高の知日家	296
人類最高のイメージ	298
周総理の「鶴の一声」	300
人物そして酒豪	303
周総理と私たち一家	305
会うたびの深い印象	311
日中友好の扉を開く	314
文化への深い理解	317
周総理あつての松山バレエ団	319
永遠に人格を讃え伝えるべき人	323
純粋な中国人	327
中国の不可分の一部になった人	333
中国の偉大な外交家	335
新中国の諸葛孔明	340
誰よりも親しみやすい人	342
卓抜した外交の教師	345
代わりのない大黒柱	347
周恩来、平和共存五原則の創始者	349
非常にハンサムな人	351
愛すべき朗らかな笑顔の人	352

軍事家周恩来

張震

中央軍事委員会元副主席

周恩来同志は、私が大変崇拜し尊敬する人物だ。彼は軍事にも政治にも優れ、あらゆる面で全党全軍のモデルであった。彼が逝去した時、靈柩車が事務所の前を通るので、最後のお別れをしようと私たちは事務所の玄関に一時間も立ちつくした。あの時の重く沈んだ気持ちは、筆舌に尽くしがたいものだった。

最も記憶に残るのは、周恩来同志が指導した南昌蜂起¹である。これによって、国民党反動派に対する武装抵抗の第一砲を鳴らしたのだ。朱徳総司令は、この時から人民が自らの軍隊を持ち、人民の軍隊が成立したと、南昌蜂起を評価している。秋収蜂起²は南昌蜂起とは異なる。南昌蜂起は大きな戦役で、会昌到着時、塹壕に薬莖や死体の山を目にしたのを覚えている。そこは、南昌蜂起の部隊が銭大均と決戦したところであった。だが戦況がおもしろくなく、部隊は広州まで引き上げることになった。もしあの時、江西の農民と結びついて根拠地を構築できていれば、あれほどの犠牲者を出さずに済んだに違いない。

その後、毛沢東同志は秋収蜂起を指導するに当たり、南昌蜂起の教訓から、

1 1927年8月1日周恩来、朱徳などが指導して江西省南昌で起こした武装蜂起。「八一南昌蜂起」ともいう。——訳者注

2 1927年9月毛沢東が湖南省東部と江西省西部一帯の労働者、農民を指導して起こした武装蜂起。——訳者注

■ 世界の注目を集めた人——証言・周恩来の実像

大都市で戦えない時は山に入って「山大王」¹となり、山間地帯を根拠地に勢力拡大をはかった。武装後も、人民の軍隊をどう建設するかについては、党内で大きな論争があった。

毛沢東同志は、われわれは人民の軍隊を組織しなければならない。この軍隊は政治的任務を遂行する集団として波のように勢力を拡大し、根拠地は拡大後に確立すべきだと主張した。しかし、それでは部隊が辛すぎると、異を唱える人もいた。何度も議論を戦わせた結果、紅四軍七大²で、毛沢東は軍事委員会書記に落選、陳毅が当選した。

その後、山頭主義、農民意識、故郷観念など、誤った思想が部隊に広がった。湖南の部隊は湖南に、湘（湖南の略称）南の部隊は湘南に帰りたがり、その結果、二度の敗戦を喫してしまった。紅四軍八大³の開会時、陳毅は結論も待たずに上海の周恩来に会いに行き、周恩来は当時の前敵委員会⁴に、「九月の手紙」と言われる指示をした。

手紙の主旨は、毛沢東に指揮をとらせよという内容であった。周恩来は、毛沢東が正しいと考えたのだ。当時、周恩来は中央軍事委員会書記で、皆その指揮下にあったが、陳毅がその手紙を持ち帰っても、毛沢東は出て来ず、理由もなく落選させ、今また理由もなく復帰させるなどとんでもない、話をつけようと言った。そして数日かけて準備をし、古田会議を開いた。その会議では、われわれの建軍にかかわる方針、方向性、政策などが決まり、今でも解放軍はその方針に従っている。

周恩来同志が偉大だと言われるのは、第一に、南昌蜂起によって国民党に対する武装抵抗の第一砲を放ったこと。第二に、「九月の手紙」で党内の思想統一に重要な役割を果たしたことだ。

1 山賊の首領の意。——訳者注

2 中国共産党中国労働紅軍第四軍団第七回代表大会の略。——訳者注

3 中国共産党中国労働紅軍第四軍団第八回代表大会の略。——訳者注

4 前線委員会。——訳者注

恩来同志が中央ソビエト区¹に来了後でも、まだ若い私が彼に会える機会は無かった。その後、瑞金で周恩来が共青团委員会書記の会議を主催し、某歩兵団の共青团委員会書記だった私も出席した。江蘇省出身の恩来同志の話は、(訛が強くて)何を言っているか分からなかったが、何日かいい食事を口にすることができた。当時、お粥に白砂糖を入れるのは極上の待遇で、すごいことだった。

紅軍の第四次「反包圍」²は、周恩来と朱徳の指揮によるもので、それまでとは闘い方を異にした。第一～第三次は、敵を深く誘いこみ、ソビエト区の中心部で戦ったが、この第四次の特徴は、ソビエト区の辺境地帯で戦ったことだ。伏兵戦や、大規模な移動戦で部隊を幾手かに分けて挟みうちにした。そして中央ソビエト区で周恩来が指揮した戦いでは最大の勝利を収め、敵の第五十二師団、第五十九師団の大部分を殲滅、第五十二師団の師団長は負傷して捕虜となり死亡した。第五十九師団長の陳時驥も捕虜となり、延安に送られた後、われわれに地形学を教えたり、講義を行ったりした。そして、抗日戦争終結後、国民党に戻った。

その頃、周恩来同志は豊かな髭をたくわえていた。上海での工作活動をカムフラージュするため、牧師のように装っていたのだろうが、われわれの目にはおかしく映った。中央ソビエト区に来了後も剃らず、会う人を怖がらせ、厳格で近づきたい人物と感じさせた。

後に中央が広昌奪回のために動員をかけ、私もそれに参加した。広昌戦役後、簡素な防御しか持たないわれわれに対して、敵は100～200メートルあるいは200～300メートル進むごとにトーチカを築いた。われわれにはそれが分からないうえに、所持する武器は小銃のみである。砲がなくて戦えない

1 中央ソビエト区は、中国土地革命戦争(1927 - 1937年)において、江西省南部と福建省西部にある革命根拠地を基盤として作られた中央革命根拠地の通称。——訳者注

2 1930年代前半、蒋介石が国民党の軍隊を指導して、共産党の紅軍に対して包圍討伐を行った。それを打開しようとして共産党が指導した紅軍が五回にわたって展開した激しい抵抗戦のことを「反包圍」という。——訳者注

■ 世界の注目を集めた人——証言・周恩来の実像

ため陣地を離れ、散発的な攻撃に止まった。

毛沢東は、これはわれわれが自ら招いた失敗だ、部隊を移動させながら敵を消滅させるべきだと言った。しかし、当時の中央は毛沢東の意見に賛成せず、それは正攻法ではない遊撃主義だと批判した。紅軍の第五次「反包囲」は、中央の方針を執行したせいで失敗し、最後には戦略変更を余儀なくされた。これが、後に長征と呼ばれるものである。

中央軍事委員会直属部隊は、瑞金に工場を設けて靴や兵器などを生産しており、前線からそこに移ったわれわれは家を借りて住んだ。その時は、戦略変更で中央ソビエト区を離れようとしていることは、まだ知らなかったが、一週間後には出発した。湖南、広東の省境まで行くと、移動中に遭遇する敵が減り、戦闘が楽になった。

敵の第一封鎖線突破の際、中央による統一戦線の工作の結果、余漢謀が道を開けた。理由は、広州に向かうわれわれを追って蒋介石軍も広州に入れば、自分がやられると恐れたからだ。但し、余漢謀は条件を一つ出した。道を開けて通す代わりに、蒋介石の軍隊を引き込まないことだった。われわれが通ってしまえば、蒋介石はもう広東に行くことはしない。こうして、第一封鎖線を闘わずして通過した。第二、第三の封鎖線を通る時には、人数も増えて精鋭部隊となっていた。私は第三軍団にいた。毛沢東は、湖南南部でいくつか戦闘をしようと提案した。第四封鎖線を突破して湘江を渡る際、紅軍は重大な損失を被った。あの時、物を全て放棄していれば、損失はあれほど酷くなかったに違いない。

湘江を渡る前には8万人以上いた部隊が、渡った後に残ったのは僅か3万人余りであった。色々考える必要があった。周恩来はまず、今後の闘い方を考えた。これほどの損失を出した以上、計画通りに紅六軍団と合流しても、数で勝る敵に包囲されたら、われわれはどう戦えばよいのか。

この時、中央指導者たちの内部で論争が起こった。焦点は紅軍の戦略的行動方針の問題であった。毛沢東は病に臥せており、王稼祥同志も負傷し